

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ④

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

ドッジボールのようなカミングアウト・キャッチボールのようなカミングアウト

先生お久しぶりです(*^^*)今も変わらず人権問題にとりくまれているのですネ。人間、皆平等って、難しいです。そのために人権問題にとりくまれているのなら、細かいことや背景は何にもわからないけど、他の人にも平等に人権があるうえで、先生には今後もとりくんでもらいたいです。

先生、当時部落地区の生徒を可愛がってるみたいで、私は嫌われてるんだって、寂しかったです(>_<)。(中略)在日や、部落地区、その人達と同じ分、私にも違う悩みがありましたから。そういう背景も視野に入れて、人権問題にとりくんでいただきたくて。(中略)誰かだけがきつい生活をしてるんだって見方をするように見受けられて、悩みがあっても言えない寂しい思いしてる人が今もいるかもしれないです(>_<)

これは、「92年度卒業生」さんという人が、2009年のある日のわたしのブログに書いてくれたコメントです。「92年度卒業生」さんは、はじめて担任をした学年の生徒で、3年生の時に担任しました。当時のわたしは、ようやく隣保館学習会で部落の生徒と、社会科学部活動の活動で在日の生徒と出会いはじめた頃でした。わたしは、そんな生徒たちから教わったことを、一生懸命クラスの子どもたちに語っていました。当時のわたしは自分も含め部落・在日以外を差別者と考え、だからこそ「君らは差別者や。そこから変化せんとアカン！」と語っていたように思います。

そんなわたしが、ある日突然「当事者」になりました。「当事者」になって最初にやったのはカミングアウトでした。とは言え、身近な人にはとてもではないですがこわくて言えません。幸いにして、わたしの知りあいは、みんな人権教育関係者です。人権教育関係者は人権課題である以上、カミングアウトを拒否することはありません。その中でも優しくな人を選んでカミングアウトしていきました。問題は、そのカミングアウトのしかたでした。ようやく名前のついた自分のこと、そしてその自分のしんどさを「わかってほし

い！」とばかりにきつと相手におつけていたんだろうと思います。

関西大学人権問題研究室の宮前千雅子さんは「カミングアウトには2種類ある。ひとつはドッジボールのようなカミングアウト。もうひとつはキャッチボールのようなカミングアウト」と言われます。ドッジボールは相手にぶつけるために、力一杯ボールを投げつけます。それに対して、キャッチボールは相手が受けとめやすいところにボールを投げます。そして投げたボールは相手が投げ返すことで、再び自分のところにやってきます。いま振り返ると、当時のわたしのカミングアウトは「ドッジボールのようなカミングアウト」だったんだろうと思います。

なぜドッジボールのようなカミングアウトをしてしまったのだらうと思う時、きつとそこは「語れるしんどさ」と「語れないしんどさ」があったのだらうと思います。前号に書いた「恵まれたしんどさ」は、実は「語れないしんどさ」でした。それに対して、「変態」としての自分は、語るとか語れないとかいう以前の問題、「しんどさ」と認識することすらできないものでした。そんなわたしは、「当事者」がうらやましかったんだろうと思います。それが、1997年のある日を境に「このしんどさは語れるかもしれない」と思った時、必死で「語れるしんどさ」にしようとしたその結果がドッジボールのようなカミングアウトになったんだろうと思います。

「92年度卒業生」さんのコメントは、それから12年間後のことでした。さまざまな人から受容されることを通して、少しはキャッチボールのようなカミングアウトができるようになったかなと思った当時のわたしは、次のようなコメントを返しました。

あれからすでに17年もたっていて^^;;。いまはずいぶん違いますよ。部落の子や在日の子が抱えている重荷と、自分自身が持っている重荷を重ねあわせること。そこに「軽い重いはない」ということ。そこから人権を考えてほしいと思っています。